

令和 5 年 5 月 27 日現在

機関番号：22401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04310

研究課題名（和文）遺体に対する「心」の知覚：死者に愛着と敬意を抱く心的メカニズムの解明

研究課題名（英文）mind perception toward the corpse: examination of the mental mechanism of attachment and respect toward the dead

研究代表者

白岩 祐子 (Shiraiwa, Yuko)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授

研究者番号：40749636

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：解剖や臓器提供などにより大切な人の遺体が損壊されることに対して、多くの日本人が否定的な態度を示す。その実情と規定因を明らかにすることを目的に、文献レビュー、解剖経験者に対する半構造化面接、大学生を対象とする実験、および大切な人との死別経験者を対象とする社会調査などを行った。その結果、1) 故人や遺族の意に反して行われる司法解剖が遺族に強い自責の念と後悔、悲嘆をもたらしており、長期にわたって持続する二次被害の要因となっていること、2) 故人の魂が存在し、自分たちの近くで見守り支えているという遺族の心象、すなわち遺族の靈魂観念、死後世界観が遺体保全への熱意と関連していることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本では臓器提供者の人口比率が顕著に低く、国外供給や臓器売買などの諸問題が表面化している。臓器移植が日本では受容されにくいことは、臓器移植法の制定過程でくりかえし指摘・議論されてきたが、本研究ははじめて実証的な枠組みからこの問題を検証し、その実相を捉えた。具体的には、解剖や臓器提供による遺体損壊の対象を「自己」「愛する人」「他者」に区別し、このうち「愛する人」に焦点化した上で、遺体損壊への忌避的態度が靈魂観念、すなわち現代日本人が潜在的に保持している死後世界観と関わっていることを明らかにした。こうした民俗的価値観を「非科学的」として切り捨てず、適切に考慮することの重要性を本研究は示している。

研究成果の概要（英文）：Many Japanese have negative attitudes toward the destruction of their loved one's remains through autopsy or organ donation. To clarify the actual situation and determinants of this attitude, we conducted literature reviews, semi-structured interviews with bereaved family members, scenario experiments, and social surveys of people who had experienced bereavement.

The results revealed that: (1) that forensic autopsies performed against the will of the deceased and the bereaved cause strong feelings of remorse, regret, and grief among the bereaved and are a cause of long-term, persistent secondary victimization; (2) that the bereaved's belief that the soul of the deceased exists and watches over and supports them is a factor in their attitudes toward preserving the body of the deceased.

研究分野：社会心理学，死生学，宗教心理学，民俗学，被害者学

キーワード：遺体損壊 司法解剖 臓器提供 臓器移植法 靈魂観念 死後世界観 心身二元論 心身一元論

1. 研究開始当初の背景

死因究明の推進はわが国喫緊の課題である。現在の死因究明システムには不備があり、とくに平均 **4.9%** という司法解剖の実施率の低さは犯罪を見逃す要因となっている（警察庁、**2014** など）。その一方、死因究明、とりわけ解剖（司法解剖）については少なくない遺族が拒絶感を示す。剃髪され、すべての脳・内臓を摘出され、縫い痕、傷痕が残る遺体、裸のまま放置されるなどモノのように扱われる遺体、顔色や表情が解剖前とは一変した遺体を目にした遺族は、**5** 年が経過してもなおフラッシュバックなどストレス障害の症状があることを報告している（地下鉄サリン事件被害者の会、**2004** など）。

死因究明手続きに起因するこうした遺族の反応は、事件の処理に向けて粛々と進められる刑事司法手続きの中では「不合理で感情的な反応」として度外視されやすい。しかし、遺族にしてみれば、遺体は亡くなった人そのものであり、なお敬意を払われるべき存在である。このような認識は遺族のみならず、社会がひろく共有する死者一般への態度といえるだろう。そのため、遺体保全に対する遺族のこだわりを不合理なものとして捨象することは、死因究明の推進が社会の理解と賛同を欠くことにつながりかねない。「我々はなぜ遺体に人格をみいだすのか」という問いは社会全体が共有している価値観に根差す問いであり、これに対して理論的・実証的な見地からの回答を社会に返すことは社会心理学の責務でもある。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下の **3** 点にある。遺体を故人そのもののようになす心理メカニズムを心の知覚 (**mind perception**) という観点から解明する。司法解剖などによる遺体の損壊が遺族にもたらす持続的な影響、とくにストレス障害の悪化に与えるインパクトを明らかにするとともに、その緩和要因を特定する。以上の結果をふまえ、解剖、臓器提供などの社会制度に一般化しうる、「死をめぐる心の知覚モデル」の基盤を構築する。

3. 研究の方法および 4. 研究成果

遺体を故人と同一視する現象を説明する理論として、当初は心の知覚に着目し、複数のシナリオ実験を行った。しかしその結果は、司法解剖されることで故人の心はより知覚されなくなる、すなわち非人間化されるという予測に反するものであった（白岩ほか、**2019**）。これは第一に、「司法」解剖という言葉のもつ強い正当性、権威性が参加者に防衛的な反応をもたらしたこと、第二に、故人を実験参加者の親しい人物とみなすよう求めたが、こうした場面想定法には限界があること、第三に、心の知覚を測定する質問項目が直截的に過ぎ、かつ非日常的な内容であり、生態学的妥当性という観点から適切な指標とはいえないこと、を示している。そこで、司法解剖に限定せず、解剖全般への態度を尋ねること、大切な人との死別経験者（遺族）に協力を求め、故人に対する態度を測定すること、および、心の知覚ではなく、「故人の死後についての心象（霊魂観念）」と「解剖や臓器提供への否定的な態度」という独立した概念を導入し、両者の関連を検討することとした。

はじめに、一般的な日本人の死後イメージを測定する尺度を作成し（白岩・堀江、**2020**）、さらにこれを **2** 人称（大切な故人）の死後世界観尺度に改定した上で、大切な人と死別を経験した人々を対象とする計 **2** 回のオンライン調査を行った。その結果、霊魂観念と解剖や臓器提供に対する態度との関連が明らかになった。すなわち、故人の魂は死後も存続すると

いう心象を抱いている遺族ほど、解剖全般および臓器提供に対して否定的な態度を示し、遺体の保全を重視した（白岩，印刷中）。

このように、大切な故人の遺体が損壊されることへの遺族の態度と、故人の死後世界に対する心象が関連していること、具体的には、霊魂観念 故人の生前の人格や意識を乗せた「魂」についての心象 が、遺体を尊ぶ遺族の態度を予測することを示した本研究は、人々が解剖や臓器提供を忌避する要因をはじめて実証的に明らかにした。遺族が、「死んだあとまで痛い思いをさせたくない」として解剖や臓器提供を嫌忌するとき、それは文字通りの意味を含んでいるといえるだろう。解剖や臓器提供は日本人の価値観との不一致をトレードオフとして成立した制度であるという事実は、解剖の利点や臓器提供の意義をいかに「啓蒙」したところで効果には限界があることを示唆している。死亡時画像診断（**Ai**）に代表される非破壊的な死因究明や、再生医療などの代替手段への移行を検討する上では、本研究が扱ったような不可視かつ潜在的な要因、すなわち国民の霊魂観念に対する目配りが欠かせないといえるだろう。

司法解剖が遺族にもたらす影響を検討するため、実際に司法解剖を経験した交通事故のご遺族に半構造化面接を行った。その結果、**10**年以上前の出来事であるにもかかわらず、故人および遺族の意志に反して当時行われた解剖が、今もなお峻烈な悲嘆と自責の念を引き起こしていることが明らかになった（白岩・唐沢，**2017**）。遺族に拒否権のない司法解剖は、深刻かつ持続する二次被害を遺族にもたらしている。

解剖に付随する手続き上の諸問題 — 遺体を遺族に無断で移動させる、物置小屋のような場所に安置する、限りある時間を一分でも多く故人と一緒に過ごしたいという遺族の心情や都合への配慮を欠く、遺体の相貌が大きく変化する（とくに女性の剃髪は遺族の悲嘆をいっそう深める）、縫合が荒く痕が痛々しい、欠損した部位がある、督促しないと解剖結果を知らされず、また裁判前という理由で結果の肝心な箇所が黒塗りにされている、解剖では結局死因が判明しなかった、など—— も指摘されたが、より本質的には解剖、すなわち遺体の毀損それ自体が遺族にとって根源的な苦痛の原因であることが示された。

以上のことから、解剖過程における遺族への配慮やコーディネーターの導入など、単に手続きを改善するだけでは遺族の二次被害を緩和するには及ばないことが示唆された。根本的な解決を図る上では、**CT** や **MRI** を用いた死亡時画像診断（**Ai**）が、非侵襲的な死因究明の手段として最善であることを本研究は明らかにした（白岩，**2019**）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 Hosaka, C. & Shiraiwa, Y.	4. 巻 19
2. 論文標題 The effects of writing a gratitude letter on life satisfaction	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Human Environmental Studies	6. 最初と最後の頁 35-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 白岩祐子・栗本真奈・唐沢かおり	4. 巻 36
2. 論文標題 形見の意味と故人との継続する絆	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会心理学研究	6. 最初と最後の頁 49-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 白岩祐子・堀江宗正	4. 巻 25
2. 論文標題 日本人の死後観：その類型と性差・年代差の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 死生学・応用倫理研究	6. 最初と最後の頁 32-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白岩祐子	4. 巻 29
2. 論文標題 関係性がない / ある事件の遺族はどんな処遇を受けるのか - 面識と罪種（殺人・致死 / 交通）が警察官の遺族対応におよぼす効果の検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 被害者学研究	6. 最初と最後の頁 120-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西菜々子・白岩祐子	4. 巻 25
2. 論文標題 死者は美化されるのか：親密な他者の死の想像が性格評価に及ぼす影響	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 死生学・応用倫理研究	6. 最初と最後の頁 32-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tsutsumida, K & Shiraiwa, Y.	4. 巻 18
2. 論文標題 A study of the death positivity bias in the evaluation of a painting.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Human Environmental Studies	6. 最初と最後の頁 31-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 白岩祐子・齋藤真由・唐沢かおり	4. 巻 24
2. 論文標題 司法解剖の告知による死者の非人間化：心の知覚理論にもとづく検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 死生学・応用倫理研究	6. 最初と最後の頁 39-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 白岩祐子	4. 巻 -
2. 論文標題 犯罪被害者遺族と死因究明：なぜAiが必要なのか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Rad Fan	6. 最初と最後の頁 27-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白岩祐子・小林麻衣子・唐沢かおり	4. 巻 55
2. 論文標題 警察による犯罪被害者政策の有効性：遺族の立場からの検討	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 犯罪心理学研究	6. 最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20754/jjcp.55.1_15	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 白岩祐子・唐沢かおり	4. 巻 16
2. 論文標題 死因究明における死亡時画像診断 (Ai) の意義：司法解剖を経験した交通死遺族との面接にもとづく検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人間環境学研究	6. 最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4189/shes.16.25	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 白岩祐子	4. 巻 in press
2. 論文標題 遺族の死後世界観と解剖や臓器提供に対する態度：死後世界観尺度(2人称)を用いた検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 in press
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 白岩祐子・堀江宗正・唐沢かおり
2. 発表標題 日本人の死後観：死後生はどのように信じられているか
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 白岩祐子・唐沢かおり
2. 発表標題 加害者は”反省”しているのか、どう”反省”しているのか
3. 学会等名 日本犯罪心理学会第57回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 白岩祐子・栗本真奈・唐沢かおり
2. 発表標題 形見における両価性：死別の受容との関係から
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミックス学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 白岩祐子
2. 発表標題 死者の存在知覚と被害者遺族にとっての生きる意味
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 白岩祐子・唐沢かおり
2. 発表標題 司法解剖という二次被害
3. 学会等名 日本犯罪心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小泉喜之介・齋藤真由・白岩祐子
2. 発表標題 遺体に対する心の知覚 - 保護・非難意図に及ぼす影響
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミックス学会第64回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 白岩祐子・齋藤真由・橋本剛明・唐沢かおり
2. 発表標題 司法解剖が死者に対する心の知覚に及ぼす影響
3. 学会等名 日本社会心理学会第58回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 白岩祐子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 306
3. 書名 入門司法・犯罪心理学 15章司法と被害者	

〔産業財産権〕

〔その他〕

白岩祐子の研究・教育ページ https://yukoshiraiwa-rana.jimdo.com/%E7%A0%94%E7%A9%B6/%E6%9F%BB%E8%AA%AD%E3%81%A4%E3%81%8D%E8%AB%96%E6%96%87/
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	唐沢 かおり (KARASAWA Kaori) (50249348)	東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授 (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関